

小樽拠点発展の礎

「鈴木商店」サイトに道内特集

総合商社の先駆けで、明治から昭和期にかけて神戸を拠点に隆盛を誇った新興財閥「鈴木商店」の歴史を掘り起こしている研究者らが、同社の歩みをまとめたインターネットのサイトに、道内での事業の足跡を紹介する新コーナーを17日開設した。同社は小樽を拠点に砂糖や小麦粉など食料品全般を扱っており、当時の貴重な写真や資料を載せて道内戦前史に光を当てる内容だ。

(東京報道 岡田圭史)

鈴木商店は1917年(大正6年)ころに売上高が当時の国民総生産の約1割に上った新興財閥。27年(昭和2年)金融恐慌で破綻したが、事業はそれぞれ、総合商社の双子の姉妹ともいわれる企業25社の支援を受けて、二ッカウキスキーなど道内連企業にも受け継がれてい

る。日本の経済史に影響を与えた企業の歴史を後世に残そうと、双日総合研究所の小林正幸主任研究員(39)や全国の研究者、当時の関係者ら約100人が今春、同商店ゆかりの企業25社の支援を受けて、「北海道特集」を新設する。鈴木商店は日本製粉の前身の製粉会社を買収、その小樽工場で生産された小麦粉は、当時、道内産の9割近くを占

が集めた資料などをもとに歩みを紹介している。

今回は、同商店が道内で幅広く事業展開していたことに着目し、北海道特集を新設する。鈴木商店は日本製粉の前身の製粉会社を買収、その小樽工場で生産された小麦粉は、当時、道内産の9割近くを占



羽幌炭鉱に入していく労働者(鈴木商店記念館提供)



北海道特集を加えてリニューアルされた公式サイト「鈴木商店記念館」と小林さん

めたといわれる。さらに、海運の隆盛に伴つて倉庫業も展開。現在も残る倉庫群や街並みを当時の写真で紹介した。同商店破綻後、関係者が留まる。小林さんは「鈴木商店は道内政財界への人材輩出や物流網構築にも寄与した。風化しつつある道内戦前史の理解を深めるきっかけになれば」と話している。